## 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Moshé LAZAR : AMOUR COURTOIS ET "FIN' AMORS" DANS LA LITTERATURE DU XIIe SIECLE, : Paris, Bibliothèque française et romane, Librairie Klincksieck, 1964, 300pp.
Sub Title	
Author	松原, 秀一(Matsubara, Hideichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.26, (1968. 11) ,p.86- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00260001-0086

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## Moshé LAZAR: AMOUR COURTOIS ET "FIN' AMORS" DANS LA LITTERATURE DU XIIº SIECLE,

Paris, Bibliothèque française et romane, Librairie Klincksieck, 1964, 300 pp.

松 原 秀 一

la fin' amors は一九六二年同じくイタリーの研究誌 Filologia e letteratura (T. VIII. pp. 253-273, 380-407) に発表され、南仏抒情詩 描 Studi mediolatini e volgari (T. VI-VII, pp. 67-96) 以 Les éléments constitutifs de la "Cortezia" dans la lyrique des Troubadours l'amour courtois dans la littérature du XII' siècle を書き改ためたものである。本書の第一章は既に一九五九年にイタリアの中世研究 恋愛」の実体は意外に捉え難いものであり、その理解にラザール氏は大きく寄与をなしたと云える。 ヨーロッパ文学に極めて重要な影響を与えたと考えられ、現代に至る西欧の女性観、恋愛観の形成にも深く関係するが、との「宮廷風」 人についての Appel, Jeanroy, Hoepfiner 以来の定説に修正を斉らした。プロヴァンサル語による中世南仏詩人の「宮廷風恋愛」は中世 の題の下に発表され南仏文学と北仏文学の恋愛観の区別の必要に注意を換起した。本書の根幹をなす第二章 Ideologic et Casuistique de によって識られている。本書は一九五七年同氏がパリ大学に呈出し同大学より博士号を取得した学位論文 Idéologie et Casuistique de 著者 Moshé Lazar 氏はイスラエルのヘブライ大学ロマン諸語文学教授であり、十二、十三世紀フランス文学についての多くの論文

ラザール氏の見解は同氏の論文の指導教授であったパリ大学の Jean Frappier 教授が一九五九年 Cahiers de Civilisation Médiévale

siècle によって広く紹介され、特にそれまで「プラトニック」なものと解されがちであったこの恋愛が十二世紀のプロヴァンサル詩人 135-156) 誌に発表した明解な論文 Vues sur les conceptions courtoises dans la littérature d'oc et d'oil

粗雑な議論をしてはならず、Courtoisie, cortezia, amour courtois, fin'amors の各々を区別して論ずる必要のある事はラザール氏の一 識させた。との詩人達の恋愛観を捉えるには厳密に作品を検討する必要があり、漠然と「中世的」とか「宮廷風恋愛」等の語によって

に於ては決してプラトニック乃至禁欲的な恋愛でなかった事を明らかにし、この恋愛を fin'amors と呼んで明確に区別する必要を認

性を恋うのは正常としても、 試みたい 九五九年の論文も、フラピエ氏の論文も強調する所であるが本書の刊行によって、その論拠と論点が明確になったので、以下に紹介を ロフに導びくものであった。古典抒情詩に歌われる愛の対象は多くが「遊女」である。相思相愛の二人が苦難に耐え結ばれるのは ・マ抒情詩人に、又、国を問わず時代を問わず見られる。しかし一方プラトンに於ては、不完全な存在が完全な存在を、即ち女性が男 - 恋愛は十二世紀の発明だ」と云うセイニョボスの著名な言は警句に過ぎるとしても、十二世紀の西欧文学に、それまでにない新し 女性観が出現したことは広く認められている。恋愛感情の文学的表現は歴史と共に旧く、旧約聖書の雅歌にギリシャ悲劇にロ 男性が女性を求めることは不健全とされ、多くのギリシャ悲劇では恋愛は狂気の業であって人間をカタス

87

牧歌的ジャンルであって、その文学を享受する貴族階級には起らぬものであった。 この伝統下にある西欧文学で、女性に対する憧憬と共に女性を崇め、女性を愛する事を幸福の源泉とし、女性に仕える歓びを歌った

のがポワティエ伯ギョーム九世であり 中世俗語文学最初の抒情詩人と 云われる。 ギョーム伯に於ては 愛は男性の特権であり、 廷風恋愛」はギョーム伯の孫アリエノール(Alienor, Eleonore)のルイ七世との結婚によって北仏に斉らされ、アリエノールの英国王 のである。 喜であるが、彼によって近付き難い高貴な人妻に対する深い思慕、愛のためにまったき服従を約する「宮廷風恋愛」への扉が開かれた この恋愛では対象として既婚の貴夫人のみが求められ、乙女は対象とされない。 恋愛は騎士の特権と考えられた。 生の歓

説であろう。この他に古典ラテン詩と Clerici Vagantes の詩の影響を考える説、宗教詩起源説(聖母崇拝)の影響説等もあるが、 この「宮廷風恋愛」の誕生も、多くの学説を産み出した。その中でも戦後一般の耳目を集めたのはアラビヤ起源説とカタリ派異端起源 詩法上の完成を示している事から西欧抒情詩の起源に数多くの仮説を斉らしている。又、一方、十二世紀に、突然出現したかに見える ギョーム九世は一○七一年に生れ一一二六年に歿した。彼の遺した十一篇の抒情詩は西欧俗語文学最古の現存作品であるにも拘らず

ていた。騎士の adoubement が一般に行われるようになるのは十二世紀中葉であるがこの頃同じく騎士の間に一般に規範として意識さ 期であり乍ら、十一世紀の顕著な人口増加と貨幣流通の増大は経済面政治面からその体制を脅やかし都市の発達と商人の発生を準備し 西欧に於て十二世紀は新しい局面を拓いた時期に当りハスキンズ以来「十二世紀ルネサンス」と呼ばれる。表面的には封建制の最盛

本には特に Denis de Rougemont によるカタリ派起源説が反響を呼んだようである。(2)

ティアン・ド・トロワの四作品を取上げ、その中に於ける「宮廷風恋愛」を分析する。この時代の限定は中世仏文学では十三世紀に入 Lazar 氏の論文は問題を十二世紀に限定し、南仏詩人達「トリスタン物語」マリ・ド・フランスの短詩、ペルスヴァルを除いたクレ

と共に非現実的になって行く。「宮廷風恋愛」は斯うした理想の騎士、貴女の理念的恋愛となって行ったのである

の性格を捉えようとする。発生について著者は「騎士作法」「精微な愛」「南仏抒情詩」の各々の起源問題を多元的に論ずる可きであるの性格を捉えようとする。発生について著者は「騎士作法」「冷ない」 い憾みがあった。ラザール氏はこれに対し、「宮廷風恋愛」が南仏に現われ、北仏に伝播し普及していった十二世紀に問題を限り、そ(3) 紀文学に投影し、その世紀に無かった物を視る事をしてはならない。「宮廷風恋愛」に関する議論でも、従来との区別が充分になされな となり象徴的表象の使用が目立ちはじめ、十四・十五世紀の尨大な散文小説、煩らわしいまでの論議と輻輳する筋による小説への途を拓 ると新らしい展開を示すので重要である。十三世紀は学僧の増加、アリストテレス発見等から文学作品中のアレゴリーの使用が体系的 くことになる。我々は中世文学を考える時、十四・五世紀の姿を投影して十三世紀文学を論ずる可きでないように十三世紀文学を十二世

れた「騎士道」は移り行く社会の中では旧体制に属する規範であった。十二世紀から盛んになる文学の中で騎士道は理想化されて行く 88

と指摘するのみで深くは立入らぬが、十字軍による東方文化との接触、特にイスパニア回教圏との交流を重視するようである。

との恋愛観は北仏に移ると、 の中世ラテン詩、宗教文学から生れたものでもない。その教説は教会にとっては受入れ難い物であるが、反教会を目した物でもない。 悦びを実見した南仏貴族達は、北仏より教会の規制の緩やかな事もあって、新らしい宮廷生活を創り、そこには女性も参加するように 消えて行った南仏上層階級の間に現われた。それまでシシリア島、イスパニアを通して垣間見ていた東方の豊かな文化と地上的な生の を初期南仏詩人達の作品の分析によって捉えようとする。 fin'amors は十一世期末に、十字軍の初めの熱情も醒め、期待も一つづつ ィアン・ド・トロワの結婚愛、 本書の中心をなす恋愛観については、十二世紀の所謂「宮廷風恋愛」と称されるものを三別し、初期南仏詩人の本書の中心をなす恋愛観については、十二世紀の所謂「宮廷風恋愛」と称されるものを三別し、初期南仏詩人の fin' amors は南仏詩人の独創とは云えぬまでも、後の北仏の「宮廷風恋愛」の様に Ovidius の影響も強くなく、学僧 物語風な文学で開拓され、在俗の学僧が作者になるため Ovidius の影響を強く受け、教会の規制の強い北 トリスタンに代表されマリ・ド・フランスにも表われる情熱恋愛の三にわけ、特にこの中の fin' amors クレテ

Peire d'Auvergne ⋈ courtois と区別する必要を強調する。Amour courtois と云う用語は十九世紀の碩学 Gaston Paris の用語であり、中世南仏詩人中では 観念を示すのには中世プロヴァンス語 cortezia を用いている。この語は領主の館、宮廷を表わす cort, cour(<lat. cohors)から出て しての明確さを欠くので狭義には fin'amors を用いる。同様に courtoisie の語も現代仏語の語義との混乱を避けるために南仏詩人の この様に南仏と北仏では恋愛観が異なって来るので Lazar Cortez' amors の一例があるのみで、一般には verai' amors, bon' amors' fin' amors と云われていた上、 氏は南仏抒情詩人の恋愛観を特に fin'amors と称んで広義の

仏ではこの恋愛の adultère 性が意識されるようになる

つ事、爽 気を持つ事の三である。とのうち精徴の愛と爽 気は北仏の Courtoisie と南仏の Cortezia を隔てる物であると云う。ラザ 解明に当てられる。ラザール氏に依れば Cortezia が成立するには三つの態度が必要とされる。 の内容は、 この語と深い関連を持つ mesura, jovens, pretz e donar 等と共に捉えにくいものであり、本書の第一章はその 即ち fin' amors で愛する事、

vilania に対応する。

術語と

六、愛する者は定められた戒律、手順に順がわねばならない。 (5) 貴女である。三、盲目的な恋でも宿命的な恋でもなく、意志と理性によって選ばれた優れた女性に奉げられる。四、女性の名は秘密に ール氏はデノミ師の「Cortezia は雅びの恋をする人の理想であり、徳であり、Courtoisie は騎士の理想である」と云う定義を引用し、 保たれる。五との恋は容易に得られてはならず (cf la Belle Dame sans merci)、多くの障害が介在しなければならぬ(cf. amor de Ionh)。 ある。一、先ず、多くは人妻に対する愛であって夫婦間に存し得ない。二、愛される女性は貴族であり、多くは愛する騎士より上層の は fin'amors とは何か? ここでは明解な Frappier 教授の解説を借りよう。フラピエ氏によれば、fin'amors には次の六つの特徴が 南仏の Cortezia を特徴づける。そして fin'amors こそ mesura, jovens, joi, cortezia pret e valor, donars の源泉であると云う。で

courtoisie では見られぬが南仏詩人の cortezia には欠く事の出来ぬものとラザール氏はテクストの上に論証する。この観念はアラビヤ 神学に見られイブン・シナ Avicenne の霊魂論第五章にも見られると云い、 そこでは「若さ」「心の濶さ」「気持の良さ」 を含む観念 がイスパニアと往復を重ねた Marcabru, Cercamon 等に多い事からアラビヤの影響をラザール氏は考えている。との Jovens は北仏の る「気前の良さ」「応暢さ」を含むのである。との両意を含む単語はロマン語祖語には無く、アラビヤ語にあるさうである。特にこの語 あり、内的規範が mezura であり理性的側面であって jovens は内的感性である。Jovens は「若さ」のみではなく王者の徳性とされ

90

この fin' amors の観念を得て初めて cortezia, mesura, jovens が捉えられる。即ち fins amanz の外的・社会的表現が cortezia で

であると云う。

出来るのである。斯の様に Cortezia, Mezura, Jovens, pretz e valor, jois の諸観念は fn' amors のとの関係上に捉えられる。十二世 て cortez で jovens な騎士が何事に於でも Mezura を保てば Pretz e valor は自ずから得られ、恋に於ては Jois, joie に達する事が amants も Yonec も desmesure から死に至っている。Cortezia, Mezura, Jovens が属性であるのに対し Pretz e valor は結果であっ でも、Cortezia と同じく Mezura が重視される事を示す。Mezura は中世に重視された徳性で Roland も Marie de France この Jovens は Mezura によって均衡を得る。武勲詩から騎士道小説に至る騎士の徳性として Mesure が重視されることは Courtoisie ⊘ deux

等の観念から、修辞上の慣用的云い廻しが多く出来、Zumthor の云う clavier を持つ文学形式をつくるが、北仏では紋切型となるこの との恋を歌い、しかもその渇望は肉欲的であり、プラトニックではないと云う。fin'amors はその Cortezia Jovens, Joi, Pretz e valor 仏詩人の恋愛観は均一に fin' amors であり、fin' amors の不道徳性を攻撃したと云う通説の Marcabru ですら作品でははっきり人妻 alistes → Marcabru で、キリスト教社会では desmesure ではないのか? 第二章 Ideologie et Casuistique de la fin'amors の百頁は、この問題に当てら 紀に南仏に現われた恋愛とはこのような構成の fn'amors なのであって、単なる女性崇拝ではない。この恋愛は人妻に向けられるのに、南仏のであって、「?」 形式も南仏では、地中海世界的情熱に支えられた個性的表現の力を持つとラザール氏は指摘し、多くの作品の分析によって、fin' amors れる。ラザール氏は、先ず、南仏詩人を、fin' amors に対する態度によって Jaufré Rudel, Bernard de Vantadorn に代表される idé に代表される réalistes に分けた Jeanroy 以来の区別は作品を分析して見ると根拠がないと論ずる。十二世紀南

特に北仏に於て開拓されたのも故なしとしない。(8) trarie Veritates」によって説明している。北仏に入ると fin' amors と道徳の問題が意識されるようになり、ここにクレティアン・ド て行く (art d'aimer)。南仏のこの恋愛は lyrique であって moral の世界と無関係であったとラザール氏は説明する。南仏社会にお 外で行なわれ、 donne naissance à une joie suprême (p. 118)) この joi に与かるのは fins amanz の特権であって vilain はこれを知り得ない。 ・トロワの amour conjugal が生れ、マリ・ド・フランスの姦通の美化が生れる。トリスタン物語の秘薬としての amour-passion の問題が けるこの恋愛と道徳の問題は、どう意識されていたのか? ラザール氏はそれをアヴィケンナ Ibn Sinna の「二重の真理説 Due Con 変質せずにはいない。修辞を支えていた構造は南仏では情熱に満ちていたが、北仏では、構造のみが斉らされ、習得される技術になっ てこの joi は肉体的快楽のみではないのである。この恋愛は恋する人を高貴にしその用語に、宗教的用語さえ用いられるが、教会の圏 の中心には官能的快楽への指向があることを明かした。恋人の目差も joi を与へ、恋の成就は全き歓喜を与える。(L'union des amants しかも反宗教ではないのである。ラザール氏が immoral ではなく amoral なのであるとするこの恋愛は北仏に入ると

91

以下の第三章、第四章は、fin' amors が北仏で如何に受入れられたかを、トマの「トリスタン物語」、 マリ・ド・フランスの「短詩」

枠の厳しさに反対している指摘(一九三頁)等、 ラザール氏の見解が作品の理解を深めた点は多いが北仏文学に於ける amour courtois する事、クレティアンの「クリジェス」の「反トリスタン性」の限界、マリ・ド・フランスが fn' amors を受容し乍らも、その規則の に関しては既知の部分も多いと思われるので以下ラザール氏の見解に対し異論のあると思われる点を二、三しるしたい。 の差異は鮮やかに見えて来る。マリの作品、又、「トリスタン」に於いて南仏 fin' amors にある l'octroi du "surplus" がはっきり存在 クレティアンの四作品アンドレ・シャプランの教説の検討によって追究して行く。fn' amors の構造が明らかになると、これらの作品 姦通と道徳の問題についてのラザール氏の見解は、確かにここに挙げられた北仏十二世紀の作品では成立するが、北仏の物語風文学

頁)これも南仏抒情詩人についても同様に云える事であり、ロマンの女性描写と抒情詩とのジャンルの違いを考慮に入れる可きと思わ れる。また、クレティアンを取上げ乍ら、彼の二つの抒情詩を考慮しないのも不用意と云えよう。特に D'amors qui m'a 北仏抒情詩でも 同様である。補説中で、 北仏抒情詩中の、 女性の 形容が抽象的で stéreotype であるとラザール氏は云うが(二六七

を南仏抒情詩と比較している点は問題を残す。補説では一応北仏抒情詩人を取り上げているが lyrique であって moral でない点は、

ラザール氏はトスリタン物語の中でトリスタンとイズーの間に置かれていた剣は、マルク王を歎むく為の作為とする。この点とイズ

しかも fin' amors と微妙な隔りを見せている事は Frappier 氏も指摘している所である。(19)

(Bartsch: Chrestomathie, pièce 32) は Bernard de Vantadour の絶唱 Quant vey la lauzeda mover

の影響の下に書か

92

脱れたトリックに類すると解するのが自然であろう。「トリスタン物語」で原トリスタンを論じないのはテクストの上に問題を扱う配 すぎているのではないかと云う懸念を感じさせる。ブランガンと替わったのは、乞食に粉したトリスタンに背負われて川を渡り偽証を するイズーの配慮として考える所では、テクストへの密着で余人の及ばぬ肉迫を示したラザール氏も近代的、合理主義的解釈に傾むき ーの姦通とフェニスの姦通は帰する点は同じとする見解、又、イズーがマルク王との初夜をブランガンに代らせたのをトリスタンに対

以上、 気付くままに問題点を取上げたが本書が、中世仏文学作品の理解に重要な問題を提起し、 中世の作品をその時代に位置づけ正

の期限の問題については論議が不足であってこの両点は惜しまれる。

beivre

ピレネを考慮に入れ、我々の注意して良い事である。中世文学の失われていた鍵の一つを、作品の味読によって取戻した好論文である。(11) oublié, enfin, que le Midi n' a été annexé à la France qu' au XIII siècle」と云う言明には、イスパニア十字軍の地理的障害としての économiquement, politiquement, le Midi se sentait plus d'affinités avec les habitants d'outre-Pyrénées qu'avec ceux du Nord. On a 心に考える傾向がある事は一考を要する。「南仏の中世人は北仏の人間よりも イスパニアに対し 親近感を持っていた Culturellement, ある。ラザール氏も云うように南仏がフランスとなったのは十三世紀であり、それまでは北仏と対等の国であったことを忘れ、北仏中 当に解釈する有力な手掛りを与えることは確かである。特に南仏文学に於ける fin'amors の特殊性を解明したことは、大きな寄与で

ラザール氏の著作としては本書の他、 notes et glossaire. Paris Klincksieck, 1966 があり、下記の諸論文がある。 Classification des thèmes amoureux et des images poetiques dans l'oeuvre de Bernard de Vantadour (Filolgia romanza, VI Bernard de Ventadour: Chansons d'amour, edition critique avec traduction, introduction,

1960, pp. 34-63: La plus ancienne adapation castillane de la Bible (Sefarad, XXII, 1962, pp. 251-295; Lis Obros: chansons hébr-La légende de L' "Arbre de Paradis" ou "Bois de la Croix", poème anglo-normand du XIII siècle, (Zeitsch. f. r. Phil, LXXV•

93

aïco-provençales (Romanica et Occidentalia, Etudes H. Péri, Jerusalem 1963, pp. 290-345)

2 Denis de Rougemont: L Amoru et l'Occident 1956, 1959 Paris (邦訳ルージュモン「愛について―― エロスとアガペ」鈴木健郎・川村克 岩波書店昭和三十四年)。

越知保夫「評論集好色と花」(筑摩書房、昭和三十八年)。 M. C. D'Arcy The Mind and Heart of Love (邦訳ダーシー「愛のロゴスとパトス 井筒俊彦、三辺文子訳、 創文社、 昭和三十二年)。

女性像については「芸文研究」第十九号「文学・芸術に現・伊藤勝彦「愛の思想史」(紀伊国屋新書、昭和三十九年)。

女性像については「芸文研究」第十九号「文学・芸術に現われたる女性像」特揖中の諸論文。

3 いると筆者は考えている。 に豊み乍らとの点から論拠が薄弱になっている。Auerbach: Mimesis も特に Chrétien de Troyes 解釈に於て十三世紀的象徴解釈に陥入って De Rougemont の著書、Dupin-La courtoisie au Moyen Agep, Picard 1931, (d' Argences, 1963) (慶大三田図書館 B

4 A. J. Denomy 師は fin'amors の特異性に最初に注目した学者と云える。同師にはとの問題に関し左記の論文がある。

Fin' amors: the pure love of the troubadours, its anormlity and possible source, Medieval Studies VII, 1945 pp. 139-207

- The Heresy of Courtly love. Boston 1947.
- "Jois" among the early troubadours, its meaning and possible source Medieval Studies XIII 1951, pp. 177-217 Jovens: the notion of youth among the troubadours, its meaning and source. Medieval Studies XI, 1949. pp. 1-22
- Courty Love and Courtliness, Speculum XXVIII, 1953. pp. 44-63.
- 5 講義録中の定義は、Jean Frappier: C*hrétien de Troyes* (Hatier, Connaissance des Lettres). に次のように要約されている。 Jean Frappier: Le Roman Breton (fasc. I. Les origines de la Légende arthurienne: Chrétien de Troyes. pp. 91-91) 同氏のこの
- son seigneur. Tout en se présentant comme un sentiment absolu, l'amour courtois n'est pas une passion aveugle ni fatale; il se fonde supérieur à celui de l'amant, si bien que le service d'amour est en partie calqué sur l'hommage féodal et les devoirs du vassal envers désacord, sinon une incompatibilité, s'accuse entre elle et le mariage. La dame dévotement aimée est le plus souvent d'un rang social La Conception de l'amour courtois, ou fine amor, est une des créations les plus orignales et les plus audacieuses du Moyen Age. Ur
- avec un code et étiquette qui réglementaient "l'avancement officiel des amants" (Stendhal) (1957 年版 pp. 14-15, l'amour courtois est en principe un amour < de loin >, fortifié par l'absence et par les obstacles. Enfin il s'est constitué en doctrine, 1968 年版 p. 11)

secret s'impose aussi aux "fins amants", et sans être nécessairement chaste—il s'en faut même beaucoup d'après certains textes sur un choix, n'exclut pas toute volonté ni raison; la dame est élue pour sa beauté physique et morale, pour sa valeur. La loi du

94

- 6 スパニアからアラブ圏の futuwwa の観念を移入したとする点には飛躍を感じさせられるが、との説は Bédier-Hazard の文学史にかわるものと Denomy 師の研究に拠る所が多い。南仏詩人作品中 Jovens は三十九例あり、その中二十七例が Marcabru の作にあるという。Marcabru がイ して昨年出版された A. Adam 編 *Littérature française* (Larousse 1967. p. 8) に全面的に採り入れられている。
- 7 courtois are universally possible, possible in any time or place and on any level of society (p. 2) と云うが、彼の挙げる amour courtois place at such a time, in such a society, is a misleading one. For I should like to suggest that the feelings and conceptions of this belief in a wholly new conception of love, is false. I am convinced that the question, why did this new feeling arise at Peter Dronke: Medieval latin and the Rise of european love-lyric (Oxford 1965) 2 "I am convinced that that received opinon, fin' amors の構造を持たない。

8

Irénée Cluzel: Les plus anciens troubadours et la légende amoureuse de Tristan et d'Iseut, Mélanges Istevàn Frank. pp. 157-170

Maurice Delbouille: Cercamon n' a pas counu Tristan. Studi Monteverdi T. I. p. 198 Irénée Cluzel: Cercamon a connu Tristan. Romania 1959, pp. 275-282.

Maurice Derbouille: Non, Cercamon n' a pas connu Tristan. Romania 1960. pp. 409-425

Irénée Cluzel: Cercamon et Tristan, Romania 1960, pp. 537-538.

10 Poetiques..... pp. 75 Sq. Jean Frappier: Chrétien de Troyes, Hatier 1957, pp. 72-73, (NIII édition augmentée 1968, pp. 69.)

拙文「中世仏文学の恋愛観と女性像」(芸文研究第十九号)北仏文学の descriptio figurae は主にラテン詩とロマンに表われる。 Cf. Faral:Arts

十三世紀にフランス王に帰したのはアキタニアであり、聖王ルイによって一二五九年に再び英国王に与えられ、仏領に戻るのはフィリップ・オギ

ュストの代になってである。プロヴァンス地方は十五世紀末、ラングドックは十四世紀、オーヴェルニュは十七世紀にフランス王権に帰属した。

11

9

**– 95 -**--